

可搬型検討アドホックにおける検討状況

1. 開催状況

- (1) 第3回 平成24年1月13日（金） 16:00～18:00
- (2) 第4回 平成24年1月31日（火） 13:00～15:45

2. 第2回作業班以降の検討状況

(1) 可搬型の利用イメージの検討

- ・災害時や障害時における伝送路の応急復旧を主な用途とすることについては特段異論がなかったが、平常時における利用については更に検討が必要という意見が多数。

(2) 技術的な要件

① 伝送チャンネル数

- ・60ch 程度のフルバンド（400MHz）で多チャンネル伝送
- ・10ch（60MHz）、20ch（120MHz）のみを伝送

という2種類に加え、

- ・VHF 帯域のみ、もしくは UHF 帯域のみのチャンネル伝送（240MHz）
- という選択肢も提案されている。

② 伝送距離（空中線電力）

- ・事業者にとっては伝送可能距離は長ければ長いほど望ましいが、送信チャンネル数や送信機コストを踏まえた検討が必要という意見が多数。

③ スペクトルマスク

- ・60ch フルバンドで送信するシステム（固定局）に比べて、10ch のシステムや 40ch のシステムは、帯域外のスペクトルマスクをフィルターで厳しく抑えられる可能性があるが、どの程度まで抑えられるかは引き続き検討

④ 可搬型システムの使用帯域

- ・仮に占有帯域が 60MHz 帯幅又は 120MHz 帯幅を使用する可搬型システムを検討する場合には、

60MHz 幅の場合：23.250-23.330MHz の 80MHz のうちの 60MHz

120 MHz 幅の場合：23.250-23.370MHz の 120MHz

が望ましい旨の要望が電波天文台側から出された。（別紙1）

- (3) 電界強度計算ソフトを用いたエリアシミュレーションの実施
(電波天文アドホックと同内容)

3. 今後の主な検討課題

- (1) 可搬型の利用イメージ及びシステム要件
- (2) 隣接システムとの共存条件、固定局との共用条件

電波天文の重要輝線周波数分布

